Where Have the Ancient Tombs Gone ?

－持田古墳群　旧 62 号墳、A～D号墳の所在について－

和田　理啓
（ 宮崎県埋蔵文化財センター）

1　はじめに

持田古墳群は宮崎県児湯郡高鍋町を流れる大河川、小丸川河口付近の北岸丘陵上に展開する大古墳群である。現状で 80 基以上が確認でき、100 mを超える計塚を筆頭に、石舟古墳、山の神塚、亀塚などの前方後円墳を含む古墳群が展開している。昭和初期に隣接する川南町の川南古墳群とともに大盗掘を受けており、その状況の聞き取りや出土遺物の追跡を行った記録が昭和 44（1969）年に報告書として梅原末治の手によってまとめられている（宮崎縣教育委員会 1969）。その報告には昭和 12（1937）年に実測、翌 13（1938）年に製図された持田古墳群の分布図が添付されており、それによると、亀塚（旧 61 号、現番号 62 号）の北側の丘陵に、62 号（旧番号）及び A、B、C、Dの5基の円墳が分布していることとなっている。地図から読み取れるこれら 5 基の円墳はいずれも 10 m以上の規模で、その分布状況、持田古墳群の主要な分布範囲から離れ、亀塚の北側丘陵に存在するという位置関係などから、同古墳群の評価に大きな影響を与えるものと考えられる。しかしながら報告書にはこれらの古墳の詳細についての記載は全くなく、1997 年刊行の『宮崎県前方後円墳集成』（宮崎県 1997）付図には、これらの古墳は存在しない。

これらの古墳はどこへ行ってしまったのだろうか。第二次世界大戦の戦中戦後、そして高度経済成長期を経て破壊されてしまったのだろうか。

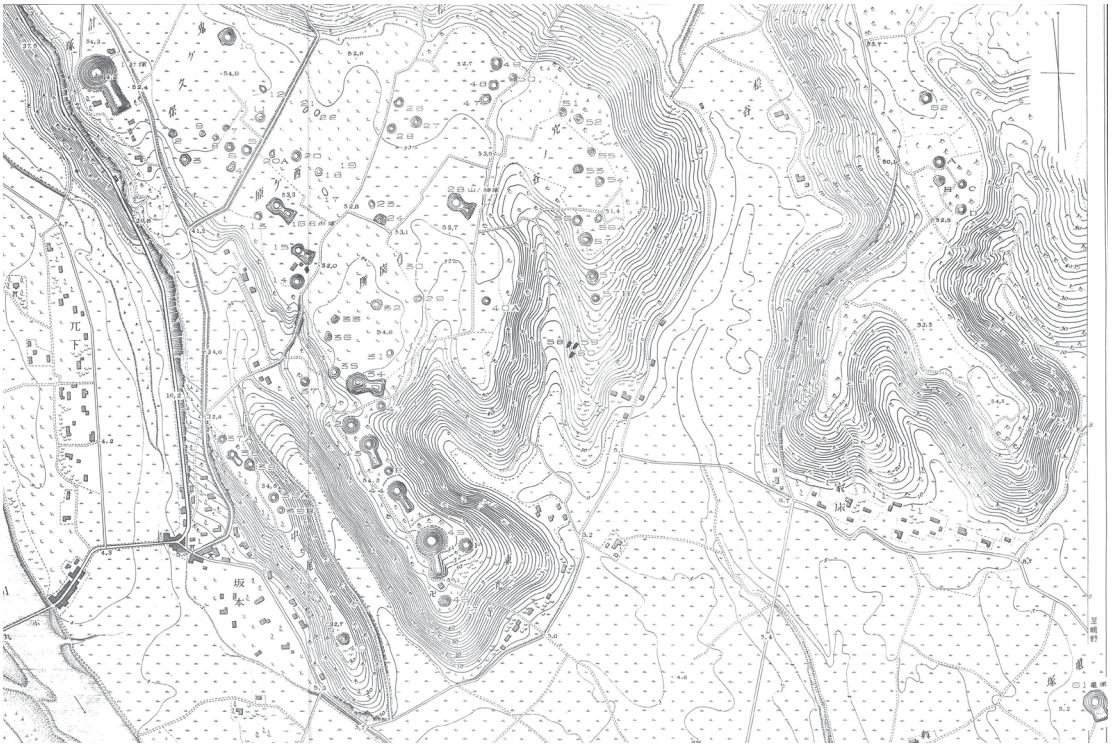

図 1　昭和 44 年の報告書に掲載された持田古墳群の分布図（1:12000 に縮小）

2　地図の比較

まず、これら５基の古墳の所在を確認するために現地踏査を行った。1969 年の報告書にある分布図（以下、69 年図）によれば、実測当時から持田付近ではほぼ路線が変更されていない県道 302 号線が尾根を登り切った標高 50 m付近の東側に５基の円墳が集中して分布している。現在付近は畑地となっていて視線を遮るものはないが、踏査した限りでは墳丘らしきものは確認できなかった。

次に、1997 年刊行の『宮崎県前方後円墳集成』の付図（以下 97 年図）との比較を行ったところ、亀塚付近の家床地区集落の北側丘陵が 69 年図と 97 年図で大きく異なった形状をしていることがわかった。69 年図では家床地区集落北側には北西から北にカーブしながら大きな谷（図２谷a）が入るが、97 年図では北北東への真っ直ぐな谷（図2谷Ａ）となっている。また家床北側の丘陵（以下家床丘陵）の形状は 69 年図では二つの細い尾根が枝分かれしておりその尾根の基部に古墳が分布するが、97 年図では家床丘陵は一定の平面的な広がりをもつ台地状の地形となっており、古墳の分布はみられない。

図2　家床丘陵の形状（左：69 年図　右：97 年図）

3　丘陵形状の差違の原因

(1) 考えられる原因

このような丘陵形状の差違の原因は以下のようなことが考えられる。

① 69 年図実測の 1937 年以降に大規模な地形改変があった。（人為的な改変のほか自然災害等による改変）

②製図段階で何らかの錯誤があり、69 年図自体が不正確なものである。

③ 97 年図に何らかの誤認があり、不正確である。

①であれば、特にそれが人為的要因によるものであれば、地形改変に伴い近辺の古墳が土取等で削平された可能性は十分に考えられる。昭和 10 年代以降、戦時体制の中、児湯郡でも軍事施設の整備が行われている。昭和 15（1940）年には現在の新富町に陸軍の新田原飛行場（現航空自衛隊新田原基地）が建設されており、それに伴い石船古墳群が調査されている（宮崎縣 1941）。また、昭和 16（1941）年には川南町内でも陸軍挺進隊の本拠地として唐瀬原飛行場が建設されている。これらの施設建設に伴い旧地形が改変されたと考えるのは妥当であろう。

②については、測量図の作成を担当したと考えられる原田仁の図面に、これまで多くの誤りが確認されていることがあげられる。持田古墳群についていえば、計塚の規模が大きく違っていたり（斎藤忠ほか 1997）、97 年図と比較した場合、69 年図の古墳分布位置がずれていたり（図 4）と不正確な部分が多い [(1)]。このことから、家床丘陵の地形についても、原田の誤りである可能性は否定できない。

③については、97 年図のほか、高鍋町作成の地形図、国土地理院作成の 1/25000 図など他の地形図と比較したところ、大きな差違は認められない。よって、その可能性は否定できる。

（2）検証

可能性のある①、②について検証を行う。

小縮尺図のため比較はやや困難であるが、明治 35 年陸軍陸地測量部作成昭和 7 年要部修正同 10 年部分修正の五万分の一図で地形を確認したところ（図3）、69 年図に近い地形だったので 69 年図が「實測」された昭和 12 年 10 月以降に家床丘陵に大規模な地形改変を伴う造成が行われた可能性は高い。近隣の新田原、唐瀬原飛行場から家床丘陵までの直線距離はそれぞれ約 10km、約 6km で隣接地とするにはやや距離があり、また関連する施設が丘陵のごく近辺に建設された痕跡も確認できないが、あるいは、そのような軍事施設の建設があったのかもしれない。単純に農地を拡充するために造成が行われた可能性も考えられるが、終戦直後にアメリカ軍により撮影された航空写真の地形なども現状と大きな差違は認められず、戦後の食料増産などに伴う地形改変は考えがたいの

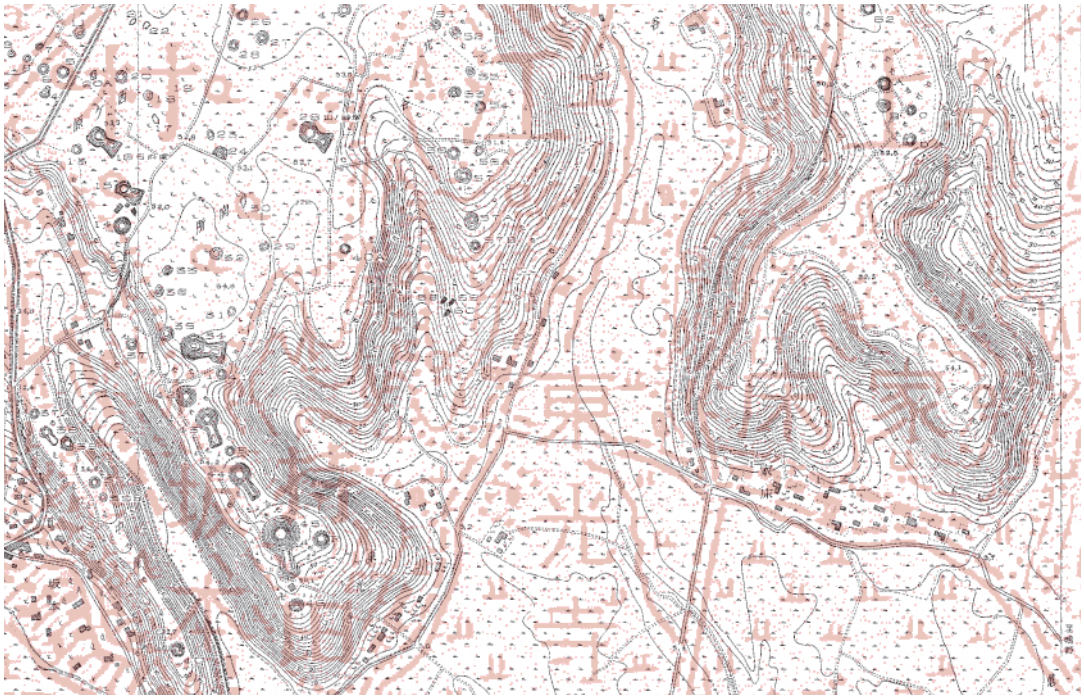

図 3　陸軍作成五万分の一図と 69 年図の比較（黒色の図が 69 年図）

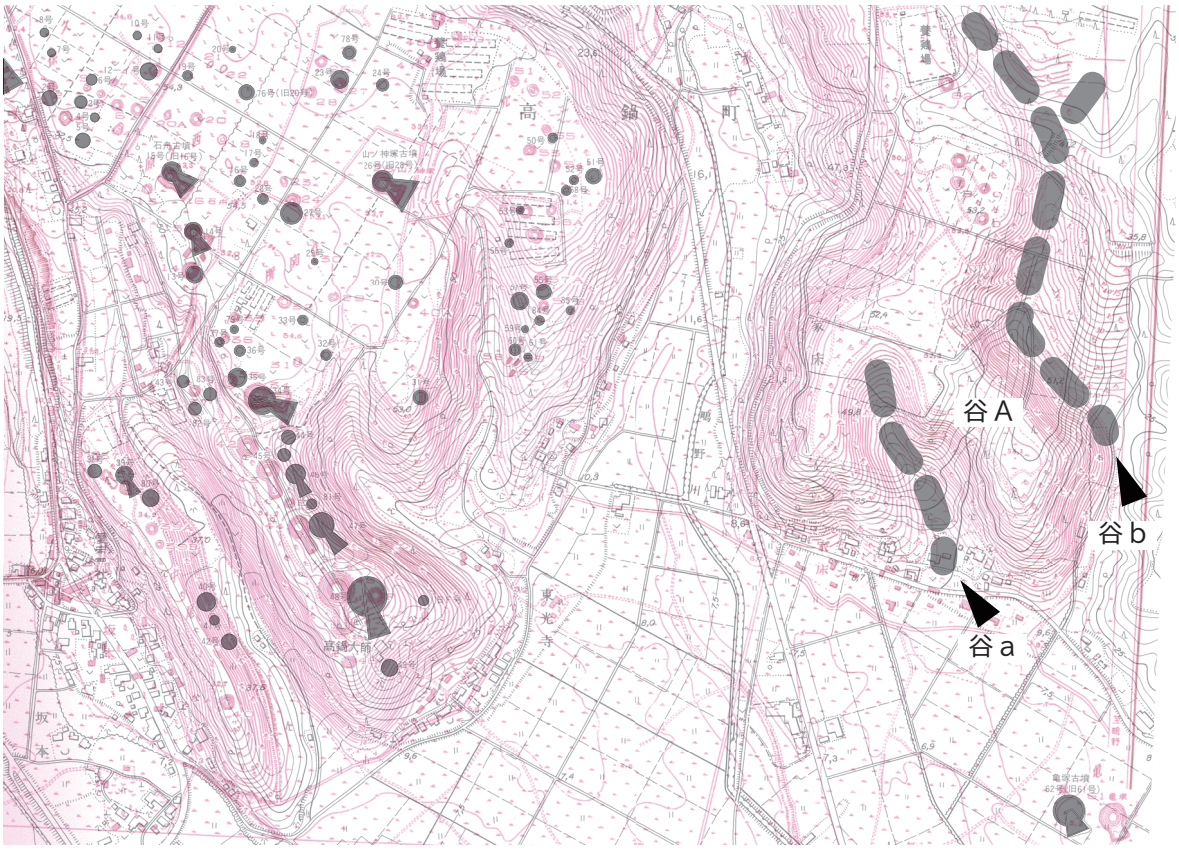

図４　69 年図と 97 年図の比較（赤色が 69 年図。古墳の分布は 97 年図を黒く塗り潰している。）

で、その場合は昭和 18 年の第一次および第二次「食糧増産応急対策」に伴うものとなろうが、当時は「農村は人手不足の中で、食糧増産に精いっぱいの努力を続けていて、土地改良や水田造成事業どころではなかった」（高鍋町史編さん委員会 1987-p.620）ようである。いずれにしろ、造成があったと考えた場合、谷aおよびbを埋め立てて得られた平坦地に、もとの丘陵尾根部分の地盤を掘削してまで谷Ａを造り出すという非常に不合理な工程を想定することとなる（図４参照）。

以上から、①②については、家床丘陵に何らかの大規模造成があった可能性は高いが、69 年図の一部に誤りや不正確な部分がある可能性もまた高いと考えられる。

4　古墳はどこへ行った

69 年図に一部製図の錯誤があったとするのならば、旧 62 号墳、Ａ～Ｄ号墳は一体どこに位置するのだろうか。

ここまで触れなかったが、国指定持田古墳群は 69 年図、97 年図の範囲外の亀塚（現 62 号墳）の東に「支群」として 12 基が指定されている。結論からいうと、69 年図にある５基の古墳は、これら 12 基の古墳の一部が製図時の錯誤に伴って紛れ込んだ可能性が高いと考えられる。12 基の内訳は亀塚の北東の丘陵上、正祐寺地区から蛸の口溜池の北東側にかけて3つほどのまとまりをつくり 11 基、正祐寺の南の海岸近く、鴫野地区の微高地上に１基である。1969 年の報告では、これらの古墳には触れられておらず、梅原は持田古墳群とは別の集団と考えていたか、もしくは盗掘に伴う聞き取りで目立った情報が得られず報告からあえて除外したのかもしれない。

分布状況からは、おそらく亀塚を中心とした集団で、それが４つほどの小グループに分かれると考

えられる（図5）。計塚などが分布する西側の丘陵（以下西丘陵）上のものとは別古墳群と捉える方が妥当で、亀塚を含め東持田古墳群とでも称するべきかもしれない。小グループは、沖積地上の亀塚から鴫野地区の一群（以下亀塚グループ）、正祐寺地区の丘陵南端に分布する３基（以下正祐寺南グループ）、正祐寺地区の北の台地に位置する５基（以下正祐寺北グループ）、蛸の口溜池北東に位置する３基（以下蛸の口グループ）の4つに分けられる。なお、亀塚以外はその内容が不明で西丘陵の一群との関係、各小グループの関係性を論じるのは現状では難しい。

では、69 年図の５基の古墳は、これら 12 基のうちどれに比定されうるだろうか。各古墳の 69 年図と正確な位置との誤差等を考慮した場合、正祐寺北グループが最もよく適合しそうである。

5　おわりに

ここまで、持田古墳群の 1969 年の報告書で分布図にあるが詳細な記載のない５基の古墳について、検討を行った。結果、報告書の分布図の誤りと、現在、持田古墳群の支群として国指定されている東側の 12 基の一部であった可能性が高いことを指摘した。その過程で、現在国指定を受けている持田古墳群は、東西の２つの別古墳群と理解すべきこと、東側の亀塚を中心として展開する古墳群は、4つほどの小グループに分離可能であることがわかった。69 年図を見ると、旧 62 号、A～D 号は何らかの調査、少なくとも墳丘の測量が行われていた可能性が高いと考えられる。今後、それらの記録が発見され、持田古墳群の評価がより一層深まることを期待したい。

図５　持田古墳群分布図（1：16000　白抜きが 69 年図から復元した古墳の位置）

註

(1) 原田は昭和 11 年に西都原古墳群の墳丘測量を行っているが、そちらについても多くの誤りを指摘されている（斎藤ほか 1997）。持田古墳群の報告書に一部掲載されている「西ヶ別府古墳群」の測量図についても、主に西別府に分布する川南古墳群に同様の地形に同様の古墳分布をみせる箇所は同定しがたい。一方で昭和 16 年に原田が作成したと考えられる生目古墳群の測量図は高い精度が確認でき、測量作業の経験を重ねるごとに精度が増していることがうかがえる。

参考文献

斎藤忠・日高正晴・田中茂・岩永哲夫・池田伸二　1997「原田仁の業績と新旧図面を比較して」『宮崎県史叢書 宮崎県前方後円墳集成』

高鍋町史編さん委員会　1987『高鍋町史』

宮崎縣　1941『新田原古墳調査報告』宮崎縣史蹟名勝天然紀年物調査報告 第十一輯

宮崎縣教育委員会　1969『持田古墳群』

宮崎県　1997『宮崎県史叢書　宮崎県前方後円墳集成』

図出典

図 1　宮崎縣教育委員会 1969 より抜粋、一部改変

図 2　宮崎縣教育委員会 1969 及び宮崎県 1997 より作成

図 3『明治 35 年陸軍陸地測量部作成昭和 7 年要部修正同 10 年部分修正五万分の一図』及び宮崎縣教育委員会 1969 をもとに作成

図 4　宮崎縣教育委員会 1969 及び宮崎県 1997 より作成

図 5　加藤・和田 2010　第2図・第3図より作成

＊表題はピート･シガーが作詞作曲したベトナム反戦歌として著名な “Where Have All the Flowers　Gone ?”（Pete Seeger,1995 邦題『花はどこへ行った』）のオマージュである。